

中世日記文学『とはずがたり』典拠論の試み

西 沢 正 史

A Medieval Diary, *Towazugatari* — A Study from the Source —

Masashi NISHIZAWA

1

わが文学研究において、方法論とはどのような意味をもっているか、という切実なる問いは、思えば永遠に古くて新しい課題であるといつてよいだろう。

ところがである。近時、文学研究における方法論的自覚をあまりもたない、あたかも随想であるかのごとき論文が少なからず目立つようである。なかには、驚くことに、然るべき学界のボスが公然と方法論を無視したり、否定したりしているのである。

昔を回顧的に書く年齢でもないが、かつて日本文学研究にあつても、いわば方法論の季節が、あざやかな色彩を競い合ったことがあつた。たとえば、文献学、民俗学、文芸学、歴史社会学、ニュークリティシズムなどの方法論的流派が、特定の拠点大学を中心に、多少の学閥もからんで、華々しく競い合い、私の若き研究者としてのスタートに鮮

明なる刻印を残したのであつた。

ところが、それらの方法論的流派は、その後の若い研究者の百花繚乱のごとき台頭によつて、あるものは凋落し、あるものは変容し、あるものは発展的に解消した結果、古い方法論を脱却した、あるいは止揚した新しい方法論の季節を、いま迎えようとしているかのごとくに見える。

ちなみに、私が関わった文芸学は、残念ながら最も凋落が著しいようである。今や文芸学は、学界ではほとんど口にするものとしてなくなり、かなり特異な遺物として疎外視されているような感さもある。文芸学の中心人物が閉塞的な人事に狂奔し、心の回路とやらをもてあそんでいるうちに、学界の大勢から取り残され、異端児扱いになつてしまつたのである。望むらくは、文芸学も方法論の一つにすぎないという謙虚な自覚のもとに、異なつた新しい血を導入し、新しい方法論とし

ての回生がはからなければならないように思う。いたずらに先祖伝来のものを排他的に墨守するのではなく、さまざまな批判に謙虚に耳を傾けることこそ、文芸学の真なる後継者としての役割ではないだろうか。

それはともかく、文学研究は、鮮烈な方法論的自覚のもとに、作品という重い存在の深々とした意味を、謙虚かつ客観的に、さまざまに問い続けていかなければならないと思う。

2

さて、中世女流日記文学『とはすがたり』は、近時研究者たちの熱い視線を集めているのみならず、一般読者からも大いなる共感をもって迎えられている。遠い歴史の彼方の闇の中から突然のごとく現代に甦ってからまだ五十余年の時間しか経過していないのに、『とはすがたり』は、中世日記文学の白眉として、いまや『平家物語』と並称されるほどに、中世文学の代表的な作品になりつつあるかのようなのである。

それは、『とはすがたり』という作品が今を去る七百余年の昔、鎌倉時代に生きた一人の高貴な女性のいわば生と性と修行とが織りなすユニークな世界を、驚くべき赤裸々な告白というダイレクトなスタイルで描いているからにはかならないだろう。

いわゆる撰関家に次ぐ清華家の一つ、名門村上源氏の久我氏に生まれた作者（後深草院二条、以下『二条』と略称）は、波乱に富んだ悲劇的な女の一生を語るにあたって、『源氏物語』をはじめとする王朝物語を実に巧妙に活用し、交響曲のような豊饒な日記文学的世界を紡ぎ

出すことにほぼ成功している。

最近、機会を与えられて、『とはすがたり』の全評釈を試みたが、その評釈作業のプロセスにおいて、作者二条の『源氏物語』への憧憬・傾倒による幅広い『物語取り』に、しばしば驚嘆させられた。『とはすがたり』は、まるで『源氏物語』によって綴られた日記文学であるかのごとく、想像を越えるほどにあらゆる点で、その多大な影響によって形成された作品であることが痛感された。

ところで、従来の研究史において、『とはすがたり』と『源氏物語』の関係については、しばしば論及され、追究されてきたが、^(注1) まだまだ十分とはいえないようである。近時、『源氏物語』の研究者として、処世的に頭角を現わしつつある三角洋一氏の新日本古典文学大系『とはすがたり・たまきはる』は、男性研究者よりも女性研究者が得意とする服飾関係の調査をはじめ、いくつかの新機軸を打ち出しているが、^(注2) 博引傍証のみを身上とするらしい（？）三角氏にしては、『源氏物語』との関係について重要な点を少なからず取りこぼしている。いまだに『源氏物語』周辺をうろついているにすぎない私でさえすぐに気づいた点であることを考えると、『源氏読みの源氏知らず』にならないように、おたがいに自戒したいものである。

それはともかく、この小論では、『とはすがたり』の異色の世界を読み解く方法として、『源氏物語』との関係を軸に、その世界に少しく立ち入り、作品論への展望を開いておきたいと思う。

3

さて、『とはすがたり』の冒頭、巻一第一段は、十四歳の結婚適齢期

を迎えた二条が、後深草院宮廷の元旦行事に、美々しく着飾って晴れやかに出仕したことを得意気に描いており、彼女の宮廷生活の始発を告げる象徴的な場面である。この場面は、すでに指摘があるように、『源氏物語』の「初音」巻における六条院の新春風景の記事をふまえて書かれたものであるという。

さらに、二条の父・大納言雅忠は、元旦の儀式である「御菓の儀」において陪膳の役を勤めるが、その後の酒宴のとき、後深草院は、酒の勢いをかりて、父雅忠に盃を賜り、待ちに待った十四歳の二条との結婚を約束させるのである。そのときの院は二十九歳であったが、プロポーズの言葉が何とも凝っていて意味深長で面白いと思う。すなわち、「この春よりはたのむの雁もわが方によ」という院のプロポーズの言葉は、諸注が引くように、『伊勢物語』第十段の歌を引歌としている。^(注5)少々長いが全文を引く必要がある。

むかし、男、武蔵の国までまどひありきけり。さてその国にある女をよばひけり。父は異人にあはせむと言ひけるを、母なむ貴てなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむ貴てなる人と思ひける。この婿がねに詠みておこせたりける。住む所なむ入間の郡三芳野の里なりける。

(母)三芳野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞ寄ると鳴くなる婿がね返し、

(男)わが方に寄ると鳴くなる三芳野のたのむの雁をいつか忘れむとなむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。

右引用の『伊勢物語』第十段では、武蔵の国の娘の縁談について、父は他の男と結婚させようとしていたが、藤原氏出身である母は、都の貴公子である男(在原業平)との結婚を積極的に進めようとし、承諾というより勧奨の歌を求婚者に贈ったことが物語られている。『とはずがたり』第一段では、後深草院は、その母の歌を利用して、父雅忠に二条との結婚を約束させたのであった。

ところが、後深草院のプロポーズの言葉の引歌として、従来の諸注では『伊勢物語』の「三芳野の」歌を指摘するばかりであるが、後深草院の言葉の本当の意図は、『伊勢物語』第十段全体に関わる、もっと深い意味があったように思われる。

すなわち、『伊勢物語』第十段は、武蔵の国の娘の縁談に対して父は反対していたが、母は積極的に賛成し、推進しようとしているという点がポイントである。後深草院は、二条へのプロポーズにおいて、その母の歌を引くことによって、『伊勢物語』の話全体をふまえ、いまは亡き二条の母、大納言典侍も自分(院)と二条の結婚を積極的に承諾・賛成してくれていたのだという点を父雅忠に言いたかったのである。従って、『とはずがたり』の第一段は、『伊勢物語』の歌を単に引歌としているという点だけで満足すべきではなく、その物語全体の間人間関係を十分にふまえて読み解かないと、作品論への十全な展望を失なうことになるのではないだろうか。このように『とはずがたり』の評釈作業を通して、素材・典拠(引歌)に関する研究の重さ・おそろしさを痛感した次第である。

ちなみに、『とはすがたり』の引歌に関しては、一般的にみて引歌というものの認定が容易ではないこともあって、諸注釈書は、かなりマチマチであり、引歌数に大きな差異を露呈していて、読者をとまどわせている。先に引いた、最新の『新日本古典文学大系』とはすがたり・たまきはる（三角洋一氏校注）は、他に例を見ないほどにすこぶる多量の引歌・参考歌等を掲出している。巧名心にかられたのかどうかはわからないが、何でもかんでも引歌にすればよいというものではないのではないだろうか。^{（注6）}一般的に引歌についての認定は、その引歌に関わる場面状況や人間関係を多方面から見きわめて、厳しい研究的視点からなされなければならないはずである。『新編国歌大観』あたりを駆使して、新発見！新発見！という研究者の功名心にかられての作業は、ある種の研究者にとつては一種の愉悅であるかも知れないが、酔い痴れた文学遊戯に墮落してゆくという危険なワナであるという認識が必要なのではないだろうか。常にわれわれは、学問的峻厳さを忘れてはならないはずである。

4

次に、本稿の焦点ともいえる『源氏物語』との関係について、新たな問題点を提起しつつ、いささか論じておきたい。

先述したように、『とはすがたり』は、日記文学であるのに、あるいは日記文学であるゆえか、構想・趣向・表現・人物・引歌などのさまざまな点で、『源氏物語』の圧倒的な影響によって形成されており、あたかも『源氏物語』によって書かれた日記文学であるといっても過言

ではないほどである。あまりにも『源氏物語』に寄りかかって書かれているゆえに、『とはすがたり』は、他の日記文学とは異なっており、ほとんど日記文学というジャンルを逸脱して、物語文学の豊かな世界へと限りなく接近しているかのようにもみえる。秋山虔氏の言われる^{（注7）}「（日記文学の）成立の機制に内在する物語の決定的な作用」は、女流日記文学という私的な狭い女の人生の再現にダイナミックな広がりを与え、豊饒な奥ゆきをもたせており、それが文学としての面白さを醸成していることは否定できないであろう。いふなれば、日記文学は、「自伝物語」風のニュアンスをもつて、豊かな結実を果たしている物語文学、なかんずく豊饒な世界を展開させている『源氏物語』を養分として成長し、新たな地平を開いていったとみることもできる。

さて、従来の研究において、『とはすがたり』における『源氏物語』の影響は、さまざまに論及されてきたが、まだ重要な点の見落としも少なくないようである。われわれ研究者は、『とはすがたり』の作者二条の「源氏素養」に少しでも近づかないと、本当の作品理解はできないであろう。

『とはすがたり』巻二の第二段は、二条と雪の曙（西園寺実兼）の贈答歌を中心とした場面である。二条の結婚に関して後深草院と父雅忠との約束が交わされた日、院の側近で、二条の初恋の人といわれる雪の曙は、もうすぐ院のものとなってしまう愛しい二条に対して、豪華な着物のプレゼントと恋文を贈り、何とか乙女心をつなぎとめようとする。それは、公的にも私的にも「気配りの人」であったという雪の曙の先制攻撃ともいえるべき作戦であった。いつの時代だって、恋は、

ゲームなのかもしれない。

ところが、その、雪の曙と二条との贈答歌は、『源氏物語』の「総角」^{あけまき}巻において、句の宮と中の君の婚儀のために、薫君が愛しい大君に着物を贈ったときの贈答歌をふまえて詠まれたものと考えられる。

へとはすがたり

(曙) つばさこそ重ぬることかなはずと着てだに馴れよ鶴の毛衣

(二) よそながら馴れてはよしや小夜衣いとど袂の朽ちもこそすれ

〈源氏物語〉(総角)

(薫) 小夜衣着て馴れきとはいはずともかごとばかりはかけずしもあらじ

(大) 隔てなき心ばかりは通ふとも馴れし袖とはかけじとぞ思ふ

両作品の歌は、表現全体としては必ずしも類似的であるとはいえないかもしれない、あるいは同時に他の歌も参考に行っているであろうが、歌の内容・意図・場面・状況・人間関係などの点が相当に類同的であり、引歌として認定できると思う。次のような類同性は、引歌認定の重要なモメントとなりうるからである。

- ① 着物を贈るという場面の類似性
- ② 贈り主である薫君二十四歳、雪の曙二十三歳という年齢の近似性
- ③ 歌を書いてあった場所が、「単衣の御衣の袖」(薫君)、「袖の上に

薄様の札」(雪の曙) という類似性

④ 「御使ひ、かたへは、逃げ隠れにけり」(源氏物語)と「差し入れて使ひはやがて見えぬ」(とはすがたり)という場面状況の近似性

右のような諸点における類似性から考えて、『とはすがたり』第二段、雪の曙と二条の贈答歌を中心とした愛の交情の場面は、『源氏物語』の「総角」巻における薫君と大君の関係をふまえて書かれたものと考えることができないだろうか。

言うまでもなく、文学作品における素材・典拠(引歌)に関する研究は、訓詁注釈のためだけの調査作業、単なる遊戯的な探索作業にとどまるべきではなく、文学作品を読み解くための前提的・基礎的・背景的な展望をもつて試みられなければならないはずである。そうした作業は、作品論への展望をもつてなされなければ、何ほどのむなし自己満足に終わるばかりである。

『とはすがたり』の第二段の場合も、『源氏物語』の「総角」巻との関係を前提的・背景的に考えることによって、作品論としての新しい展望が開かれてくる。すなわち、雪の曙の豪華な衣裳の贈り物は、彼が前々から誓い合っていた二条との結婚のための婚礼衣裳ではなかったかという説^(注8)があるが、その説は、『源氏物語』において、薫君が贈った着物が、句の宮と中の君の婚儀のときに大君が着るものであることを考慮すると、大いなる可能性をもつにいたる。作品論への展開は別の機会に譲らざるをえないが、婚礼衣裳説を前提に考えると、後深草院は、愛を誓い合っていた雪の曙と二条の婚約を強引に踏みこじって

二条との結婚を強行したことになり、彼女の悲劇的な人生の始発を告げる象徴的な場面として第二段を読み解くことが可能であろう。

5

さらに、『とはすがたり』と『源氏物語』の関係について、新たな問題を提起しておきたい。

『とはすがたり』巻二の第十段は、第三の男、高僧有明の月（性助法親王）との初めての交情を描いた場面である。建治元年（一二七五）三月、二条の十八歳の春、後白河院御八講の結願の日、後深草院の弟で、仁和寺御室の高僧有明の月に思わざる恋をうち明けられ、さらに同年九月、後深草院の病悩の祈願のために院参した有明の月と最初的情交を結んだのだった。

◎へとはすがたり 卷二十段

（後深草院の病氣祈禱のために）、さてもこの阿闍梨（有明の月）に御参りあるは、この春、袖の涙の色を見せ給ひしかば、御使ひに参る折々も、言ひ出だしなどし給へども、まぎらはしつゝ過ぎゆくに、このほど細やかなる御文を賜はりて、返事を責めわたり給ふ。いとむつかしくて、薄様の元結のそばを破りて、「夢」といふ文字を一つ書きて、参らするとしもなく、うち置きて帰りぬ。また参りたるに、櫛の枝を一つ投げ給ふ。取りて、片方に行きて見れば、葉に物書かれたり。

櫛摘む暁起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき

初めて味わった禁断の恋にもだえ苦しむ高僧有明の月の哀切な人間像は、『とはすがたり』の中では庄巻のものであり、すぐれて中世文学的であるといつてよい。愛欲（本能）と仏道（理性）との相剋・葛藤の中でのたうちまわる高僧の生々しい人間像は、『破戒僧』などという陳腐な規定を越えて、中世文学の作者たちが追い求めた人間像の中で最も象徴的な意味を有するものであるように思われる。

ところが、その二条と有明の月の最初的情交の場面は、諸注指摘していないが、『源氏物語』の「総角」巻において、薫君が、父八の宮の一周忌の法要で美しい喪服姿となった大君のいる仏間に侵入し情交を迫る場面をふまえて描かれている。両者の構想・表現・場面状況の類似性を対照してみると、次のとおりである。

◎へ源氏物語（「総角」巻）

○八の宮の一周忌の日の夜、薫君は大君のいる仏間に侵入する。

（薫君は）仏のおはする中の戸を開けて、御灯明の灯けざやかにかがせて、簾に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油まゐらすれど、へ薫へ「悩まして無礼なるを。あらはに」など諫めて、かたはら臥し給へり。御菓物など、わざとはなくしてまゐらせ給へり。御供の人々にも、ゆるゆるしき肴などして、出ださせ給へり。廊めいたる方に集まりて、この御前は人気遠くもてなして、しめじめと物語聞こえ給ふ。うちとくべくもあらぬものから、なつかしげに愛敬づきてものたまへるさまの、なのめならず心に入りて、思ひ焦

優におもしろくおぼえて、この後少し心にかかり給ふ心地して、御使ひに参るもすすましくて、御物語の返事もうちのどまりて申すに、御所へ入らせ給うて、御対面ありて、有「かくいつとなくわたらせ給ふ事」など嘆き申されて、有「御撫物を持たせて、御時始まらむほど、聴聞所へ人を賜はり候へ」と申させ給ふ。初夜の時始まるほどに、院「御衣を持ちて聴聞所に参れ」と仰せあるほどに、参りたれば、人もみな伴僧に参るべき装束しに、おのおの部屋部屋へ出でたるほどにや、人もなし。ただ一人おはします所へ参りぬ。私「御撫物いづくに候ふべきぞ」と申す。有「道場のそばの局へ」と仰せ言あれば、参りて見るに、顕証氣に御灯明の火に輝きたるに、思はずに萎えたる衣にて、ふとおはしたり。こはいかにと思ふほどに、有「仏の御しるべは、暗き道に入りても」など仰せられて、泣く泣く抱きつき給ふも、あまりうたてくおぼゆれども、人の御ため、こは何事ぞと言ふべき御人柄にもあらねば、忍びつつ、私「仏の御心の内も」など申せども、かなはず。見つる夢の名残りも、うつつともなきほどなるに、「時よくなりぬ」とて、伴僧ども参れば、後ろの方より逃げ帰り給ひて、有「後夜のほどに、いまだ一度、必ず」と仰せありて、やがて始まるさまは何となきに、参り給ふらむとおぼえねば、いと恐ろし。御灯明の光さへ曇りなくさし入りたりつる火影は、来む世の闇も悲しきに、思ひこがるる心はなく、後夜過ぐるほどに、人間をうかがひて参りたれば、このたびは御時果てて後なれば、少しのどかに見たてまつるにつけても、むせかへり給ふ気色、心苦しきものから、明けゆく音するに、肌

らるるもはかなし。(中略、薫君が大君のいる仏間に押し入る)。いとむくつけくて、なからばかり入り給へるに引きとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、大「隔てなきとはかかるをや言ふらむめづらかなるわざかな」と、あはめ給へるさまのいよいよをかしければ、薫「隔てぬ心をさらに思し分かねば、聞こえ知らせむとぞかし。めづらかなりとも、いかなる方に思し寄るにかはあらむ。仏の御前にて誓言も立てはべらむ。うたて、な怖ぢ給ひそ。御心破らじ、と思ひそめてはべれば。人はかくしも推しはかり思ふまじかめれど、世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」とて、心にくきほどなる灯影に、御髪のコぼれかかりたるを搔きやりつつ見給へば、人の御けはひ、思ふやうに、薫りをかしげなり。(中略)(大君の)何心もなくやつれ給へる墨染めの灯影を、いとはしたなくわびしと思ひ惑ひ給へり。薫「いとかくしも思さるやうこそは、と恥づかしきに聞こえむ方なし。袖の色をひきかけさせ給ふはしもことわりなれど、こころ御覧じ馴れぬる心ざしのしるしには、さばかりの忌みおくべく、今はじめたる事めきてやは思さるべき。なかなかなる御わきまへ心になむ」とて、かの物の音聞きし有明の月影よりはじめて、をりをりの思ふ心の忍びがたくなりゆくさまを、いと多く聞こえ給ふに、恥づかしくもありけるかな、とうとましく、かかる心ばへながらつれなくまめだち給ひけるかな、と聞き給ふこと多かり。御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ臥し給へり。名香のいとかうばしく匂ひて、櫛のいとはなやかに薫れるけはひも、人よりはけに仏をも思ひきこえ給へる御心にてわ

着たる小袖に、わが御肌なる御小袖を、強ひてへ有^レ「形見に」とて着かへ給ひつつ、起き別れぬる御名残りもかたはなるものから、なつかしくあはれとも言ひぬべき御さまも、忘れがたき心地して、局にすべりてうち寝たるに、いまの小袖の襟^{つま}に物あり。取りて見れば、陸奥紙をいささか破りて、

うつつとも夢ともいまだ分きかねて悲しさ残る秋の夜の月

右の引用部分を中心に、『とはすがたり』と『源氏物語』とを対比してみると、

- ①季節が八月であること
- ②仏前における男女の情交という場面設定
- ③僧衣姿（有明）と喪服姿（大君）という服装の設定
- ④傍点部分を中心とした表現

などの諸点において、両者はきわめて類似的・類想的である。作者二条は、有明の月との最初の情交場面を描くにあたって、季節・場面状況・テーマ（宗教と愛欲の葛藤）などの点できわめて類似的である、『源氏物語』の「総角」巻における薫君と大君の危険な場面を利用しているのである。

もつとも、『源氏物語』にあつては、仏前の大君の喪服姿の悲しいまでの美しさに、薫君はなすすべもなく一夜を明かすしかなかったのであるが、『とはすがたり』では、有明の月は、暗い仏罰への恐れを越えたおぞましい情念の中で、うら若き二条を犯してしまうという点で、王

づらはしく、墨染のいまさらに、をりふし心焦^いられしたるやうにあはあはしく、思ひそめしに違^{たが}ふべければ、かかる忌みなからむほどに、この御心にも、さりとも少したわみ給ひなむなど、せめてのどかに思ひなし給ふ。

朝文学たる『源氏物語』の世界を越えて、ぬきさしならぬ宗教と愛欲の相剋をテーマとすることの多い中世文学としての特質が見出される。

なお、『源氏物語』の「総角」巻において、右の引用文に近接して、次の一文があることは、有明の月との情交場面と薫君の物語との関係の傍証となるはずである。すなわち、

「薫」事あり顔に朝露もえ分けはべるまじ。また、人はいかが推しはかりきこゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、ただ世に違ひたることにて、今より後も、ただ、かやうにしなさせ給ひてよ。よにうしろめたき心はあらじと思せ。かばかりあながちなる心のほども、あはれと思し知らぬこそかひなけれ」とて、出で給はむの気色^{けしき}もなし。

右の『源氏物語』の場面は、『とはすがたり』第一巻、後深草院と二条の初夜の翌朝の後朝の場面ときわめて類似的である。すなわち、

(院)「事あり顔なる朝帰りかな」とひとりごち給ひて、起き出で給ふとて、(院)「あさましく思はずなるもてなしこそ、振分髪ふりわけの昔の契りも、かひなき心地すれ。いたく人目あやしからぬやうにもてなしてこそ、よかるべけれ。あまりに埋うめもれたらば、人いかが思はむ」など、かつは恨みまた慰め給へども……。

という文章は、傍点部分を中心に、前掲の『源氏物語』の文章と近似している。作者二条は、『とはすがたり』において、性愛関係の成立しなかつた後深草院との後朝きふぎの別れの場面を、『源氏物語』の中で、状況的に類似している、性愛関係にまで及ばなかつた薫君と大君の仏間の場面場面に続く後朝の別れの場面をふまえて描いたものとみられる。『源氏物語』の「総角」巻は、女性である二条の好きな巻であつたのであるうか。

本稿では、『とはすがたり』と『源氏物語』の関係について、新見の一端を示したにすぎず、トータルな関係の意味に関しては別稿に譲らざるをえないが、典拠論としての展望を記しておきたい。

一般的に、『源氏物語』は、中世の公家にとって、なかならず中世の文学者たちにとって、滅びゆく王朝文化、輝かしかつた王朝文学の「聖典」であつたとみられるが、とりわけ皇族の系譜につながる村上源氏の家に生まれた二条にあつては、単なる聖典を越えた意味をもつていたにちがいない。ちなみに、清華家たる村上源氏の祖・具平親王ともひらは、『源氏物語』の冷泉院の準拠の一人とされている村上天皇の皇子であつた。それゆえ、作者二条の『源氏物語』への傾倒・没入は、『源氏物

語』の人物や場面を自己の人生と重ね合わせ美化・理想化・悲劇化するという物語的方法として示されているとともに、自らの家門につながる遠い先祖の歴史であるという、一種の「先祖返り」の精神の発現として捉えることも不可能ではないのではないだろうか。

もとより『源氏物語』との関係については、さらなる典拠研究の成果を十分にふまえて、さまざまな角度から総合的になされなければならないが、『とはすがたり』の作品論の十全なる構築には、何にもまして、『源氏物語』の「物語的機制」の内実を追究してゆくことが最大の課題であるように思うのである。

6

『とはすがたり』の後半(巻四・五)は、二十六歳の秋に御所を追放された二条が、三十一歳頃に出家して尼僧姿となり、諸国を修行遍歴したときの旅の記録、つまり紀行文的な部分である。二条の旅の記録は、西行をはじめとする古人の足跡を訪ね、歌枕を確認するという伝統的な紀行文のスタイルによって、前半の宮廷愛欲編に比べると、生彩を欠いているようにもみえる。

しかし、後深草院との石清水八幡宮での再会、伏見での一夜の語らい、後深草院の崩御・葬送などの記事は、その平板な紀行文的な記事の中でも、二条の愛の行く方を象徴的に語っており、すぐれて文学的である。なかでも、巻四第二十段の石清水八幡宮での後深草院との劇的な再会は、虚構ではないかと言われるほどに、物語的・演劇的に描かれていて、すぐれて感動的な文学性豊かな場面である。

すなわち、二条は、三十四歳の二月、諸国遍歴の旅の空にあったが、たまたま立ち寄った石清水八幡宮で、参詣中の後深草院に偶然に見出だされ、八年ぶりに劇的な再会を遂げる。その場面は、諸注指摘はないが、彼女が憧憬する西行に関する記録をふまえて書かれたものではないかと思われる。

鎌倉幕府の公式記録である『吾妻鑑』によれば、文治二年（一一八六）八月十五日、かの平重衡に焼打ちにされた東大寺大仏再建のための勧進活動の旅の途にあった六十九歳の老僧西行は、鎌倉の鶴岡八幡宮を巡遊中、参詣中の源頼朝に偶然見出だされ、その邸宅に招かれて歌道と弓馬の道について一夜親しく語り合ったという。そのときの状況を『吾妻鑑』は次のように伝えている。^(注9)

文治二年八月

十五日己丑。二品（源頼朝）、御参詣^{アルニ}鶴岡宮^ニ。而老僧一人徘徊^ス鳥居ノ辺^ニ。怪^ミ之^ヲ。以^テ景季^ヲ令^レ問^ハ名字^ヲ給^フ之^処。佐藤兵衛尉憲清法師也。今号^ニ西行^ト云々。仍^{リテ}奉幣以後^ニ。心静^{カニ}遂^ニ謁^ス見^ヲ。可^レ談^ス和歌ノ事^ヲ之由被^ニ仰^セ遣^ハ。西行令^レ申^ニ承^ル之由^ヲ。廻^ニ宮寺^ヲ奉^ニ法施^ヲ。一品為^ニ召^ニサシガ彼ノ人^ヲ。早速還御^{アリ}。則^チ招^ニ引^シ営中^ニ。及^テ御芳談^ニ。此間。就^ニ哥道并^{ヒニ}弓馬^ヲ。更^ニ。条々有^リ被^ニ尋^ネ仰^セ更^ニ上^リ。西行申^{シテ}云ク。弓馬ノ更者。在俗之当初。愁^モ雖^モ伝^フト家風^ヲ。保延三年八月遁世之時。秀郷朝臣以来九代嫡家相承兵法焼^キ失^ヒ。依^レ為^ニ罪業^ノ因^ニ。其ノ更曾以^テ不^レ殘^ニ留^セ心底^ニ。皆忘却^シ了^ヌ。詠哥者。对^ニ花月^ニ動感之折節。僅^{カニ}作^ニ卅一字^ヲ許也。全ク

不知^ニ與旨^ヲ。然^{レバ}者。是彼無^レ所^ニ欲^{スル}報^ジ申^{サント}云々。然^{レドモ}而恩問不^ニ等閑^{ナラ}之間。於^ニ弓馬ノ更^ニ者。具^ニ以^テ申^ス之。則^チ令^メ俊兼^ヲ記^シ置^カ其ノ詞^ヲ給^フ。緯^ニ被^レト專^ニ終夜^ヲ云々。

『とはすがたり』と『吾妻鑑』を対比してみると、出会いの場所が石清水八幡宮とその流れである鶴岡八幡宮であること、女西行と呼ばれる二条が西行の旅に強い憧憬をもっていたこと、巡遊中の旅人を偶然に見出だして語り明かすという趣向をとっていることなどから考えて、石清水八幡宮での後深草院との再会の場面は、『吾妻鑑』またはそれと同様な記録・説話をふまえて書かれたものではないかと思われる。なお、『吾妻鑑』によれば、源頼朝は、翌日別れの贈り物として西行に「銀作の猫」を与えたというが、それは、『とはすがたり』で、後深草院が別れの形見として二条に小袖を与えたという点と符号する。

従来の研究において、『とはすがたり』と西行の関係については、主として和歌との関係が論及されてきたが、西行に関する説話・伝記・記録などとの関わりもさらに追究してゆかなければならないのではないだろうか。幼き日より西行への強い憧憬をもち続けていた二条は、彼の和歌だけではなく、広く西行関係の文献を見ていた可能性が大きいと思われるからである。

一般的に、文学研究に関する典拠論は、われわれ日本文学研究者が文学作品のみを対象としがちであるという狭隘な視点をもつ者が少なくないせいか、どうも文学作品に片寄りがちな傾向があるようである。文学作品の形成の基盤は、必ずしも文学作品だけでなく、歴史書・記

録類などをはじめとする相当に広いものであるといつてよいと思う。

従つて、『とはすがたり』と西行の関係においても、『西行』和歌』という狭い発想から脱却して、物語・説話・記録・伝記・歴史書などの広い土壌の中で追究されなければならないであろう。

なお、本稿は、『とはすがたり』の執筆にあたつて、重要な役割を果たしている『源氏物語』との関係を中心に論じたつもりであるが、そのごく一部を提示したにすぎないものである。本稿の続きは、刊行が予定されている『中世日記・紀行文学集成』の第四巻『とはすがたり』を参照していただければ幸いである。

〔注〕

1 『中世日記・紀行文学集成』（全八巻）の第四巻（勉誠出版刊の予定）。

2 福田秀一氏『とはすがたり』と『源氏物語』（『成城文芸』昭43・

9 後に『中世文学論考』に改稿収録）、清水好子氏『古典としての源氏物語』（『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』昭54）、西沢正史『とはすがたり』における『源氏物語』の受容』（『学苑』昭62・

9）、宮川葉子氏『とはすがたり』覚書』（『文学・語学』平4・6）など。

3 新日本古典文学大系は、本文の整定、出典・引歌の調査については従来にない創意工夫が認められるものの、他の注釈書の二倍ぐらゐの引歌・参考歌等を恣意的に羅列していること、『源氏物語』などの重要な出典の見落としが少なくないこと、解説部分が単なる事実

関係の詮索だけで、すこぶる皮相的であることなど、岩波書店の本であるだけに至極残念である。

4 清水好子氏『古典としての源氏物語——とはすがたり執筆の意味——』（『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』昭54）。

5 『伊勢物語』の本文引用は、新潮日本古典集成『伊勢物語』（渡辺実氏校注 昭51）による。

6 『源氏物語』の本文引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』（秋山虔氏ほか校注 平9）による。

6 『とはすがたり』の引歌については、三角洋一氏への批判も含めて、いずれトータルな稿を成す予定である。

7 秋山虔氏『女流日記文学の発生——蜻蛉日記と更級日記』（『王朝の文学空間』昭59・3）。

8 岩佐美代子氏『とはすがたり』の衣裳』（『国文鶴見』平5・12）。

9 『吾妻鑑』の読み方は、久保田淳氏『日本の作家16 『西行』（平8）収載のものによる。なお、西行と源頼朝に関する説話は他にもあろうが、本稿では最も基本的な文献である『吾妻鑑』によっておく。

〔注記〕

本稿における『とはすがたり』の本文引用は、新潮日本古典集成『とはすがたり』（福田秀一氏校注 昭53）によるが、私意によって表記を改めたところがある。